2Dp－2

肥満学生の体内脂肪率と血清過酸化脂質量

○赤澤典子、高橋恒男
（岩手大）

目的　近年肥満や生活習慣病の増加とその発病の若年化が問題にされている。脂質はからだの構成成分であるが、体内で脂質過酸化の可能性が指摘される。過酸化脂質は生体の組織の代謝機構を低下させると考えられている。本報告では高度肥満学生と健常学生を対象とし、血清過酸化脂質と体内脂肪率、ＢＭＩ（Body mass index），Ｗ／Ｈ（ウエストとヒップの比），肝機能、血清脂質との相関性について検討したので、その結果について報告する。

方法　高度肥満学生（ＢＭＩが30以上の者）約30名と健常学生（ＢＭＩが平均22）約20名を対象とした。空腹時採血を行い、血清は分離後分注し測定まで凍結保存した。血清ＧＯＴ，ＧＰＴ、ＣＨＥ，血清脂質（総コレステロール，ＨＤＬ，ＬＤＬ，トリグリセリド）を測定した。血清過酸化脂質の測定は大石の蛍光測定方法により、分光蛍光光度計で蛍光強度を測定した。

結果　体内脂肪率は健常学生が20.2で高度肥満学生は33.7で、体内脂肪率は有意に高値であった。高度肥満学生ではＧＯＴが高い者が29%，ＧＰＴが高い者は62%と肝機能の異常を示す者が多く、また健常学生に比べ総コレステロール，ＬＤＬは有意に高く、ＨＤＬは有意に低値であった。高度肥満学生の25%が血清脂質で異常値を示した。血清過酸化脂質は健常学生に比べ有意に高値であった。肥満学生の中でも血清過酸化脂質がより高い者は体内脂肪率が高く、血清過酸化脂質はＢＭＩより体内脂肪率とよく相関することが認められた。